

I-236 ケーブル橋の強制振動について

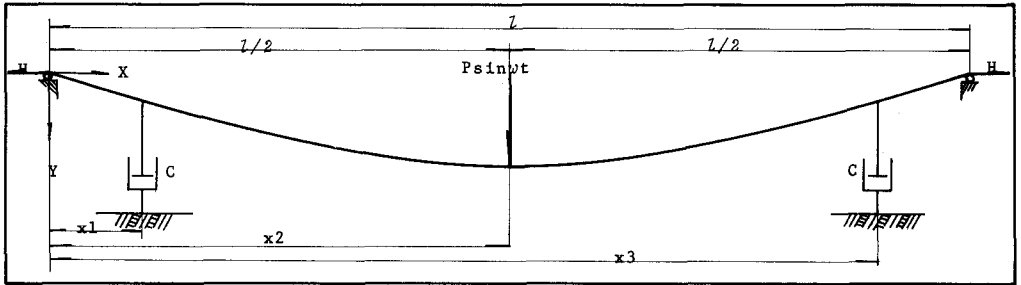
東北工業大学 正員 高橋 龍夫
 同 上 正員 〇松山 正将
 同 上 正員 山田 俊次

1; はじめに

著者等は、引張の構造物としての、ひとつの新しい橋梁構造形式(ケーブル橋)を想定した、等分布荷重を担う平行なケーブルの動力学的性状と、このケーブルに振動制御用オイルダンパーを設けた場合の制振効果等について、基礎的資料の収集に努めている。

本文においては、サグが比較的小さく、水平方向に等分布荷重が載荷されているケーブルに、粘性抵抗力が集中的に作用する場合の、ケーブルの強制振動について述べるものである。

2; 運動方程式について.



上図において、座標原点を左支点として、2個の集中粘性抵抗力を対称に設置し、スパン中央に加振力として正弦波状外力を作用させた場合、次の仮定条件のもとに運動方程式を立てると、次式となる。

仮定条件①ケーブル形状は、放物線とする。

②水平方向に等分布質量があり、ケーブルの自重は考慮しない。

③振動振幅は微小とし、振動にわみによる水平反力の増分を考慮しない。

$$m \frac{\partial^2 y}{\partial x^2} - H \frac{\partial^2 y}{\partial x^2} + C \frac{\partial y}{\partial x} \{ \delta(x-x_1) + \delta(x-x_3) \} = P \sin \omega t \delta(x-x_2)$$

\$m\$は単位長当りの質量、\$H\$は水平反力、\$C\$は粘性抵抗力係数を示す。

初期条件 \$x=0 \quad y(0,x)=0 \quad t=0 \quad \dot{y}(0,x)=0\$

境界条件 \$x=0 \quad y(x,0)=0 \quad x=l \quad y(x,l)=0\$

上記の条件のもとに、過渡振動解を求めるに次式となる。

$$y = \frac{p\omega}{a\beta} \left[\frac{e^{ax}}{a(\omega^2 + \omega^2)} \left(\frac{D_1}{D_2} \eta_1 - \eta_2 \right) \right]_{s=i\omega} + \sum_{j=1}^{\infty} \frac{p\omega}{a\beta} \left[\frac{e^{ax}}{(\omega^2 - \omega_j^2)} \cdot \frac{D_1}{a\beta} \eta_j \right]_{s=i\omega_j + N_j}$$

右辺第1項は、強制振動の定常解を示し、第2項は、強制力によって生ずる自由振動解を表わしている。

$$a^2 = \frac{H}{m}; \quad p = \frac{P}{m}; \quad \alpha = \frac{C}{\sqrt{mH}}; \quad \beta^2 = \frac{\omega^2}{a^2}$$

$$D_1 = \sinh \beta(l-x_2) + \alpha \cdot \sinh \beta(x_3-x_2) \cdot \sinh \beta(l-x_3)$$

$$D_2 = \sinh \beta l + \alpha \{ \sinh \beta x_1 \cdot \sinh \beta(l-x_1) + \sinh \beta x_3 \cdot \sinh \beta(l-x_3) \} + \alpha^2 \cdot \sinh \beta x_1 \cdot \sinh \beta(x_3-x_1) \cdot \sinh \beta(l-x_3)$$

$$\eta_1 = \sin \beta x + \alpha \cdot \sin \beta x_1 \cdot \sin \beta (x - x_1) + \{ \alpha \cdot \sin \beta x_3 + \alpha^2 \cdot \sin \beta x_1 \cdot \sin \beta (x_3 - x_1) \} \cdot \sin \beta (x - x_3)$$

$$\eta_2 = \sin \beta (x - x_2) + \alpha \cdot \sin \beta (x_3 - x_2) \cdot \sin \beta (x - x_3)$$

自由振動解については、先に報告してあるの^②、第1項の強制振動項を整理すると、次式となる。

$$s = \pm i\omega; \quad \beta = \pm \frac{i\omega}{a}; \quad \frac{\omega}{a} = \delta$$

$$\eta_{11} = \alpha \{ \sin \delta x_1 \cdot \sin \delta (x - x_1) + \sin \delta x_3 \cdot \sin \delta (x - x_3) \}; \quad \eta_{12} = \sin \delta x - \alpha^2 \sin \delta x_1 \cdot \sin \delta (x_3 - x_1) \cdot \sin \delta (x - x_3)$$

$$\eta_{21} = \alpha \cdot \sin \delta (x_3 - x_2) \cdot \sin \delta (x - x_3); \quad \eta_{22} = \sin \delta (x - x_2)$$

$$D_{11} = \alpha \cdot \sin \delta (x_3 - x_2) \cdot \sin \delta (x - x_3); \quad D_{12} = \sin \delta (x - x_2)$$

$$D_1 = \alpha \{ \sin \delta x_1 \cdot \sin \delta (x - x_1) + \sin \delta x_3 \cdot \sin \delta (x - x_3) \}; \quad D_2 = \sin \delta x - \alpha^2 \sin \delta x_1 \cdot \sin \delta (x_3 - x_1) \cdot \sin \delta (x - x_3)$$

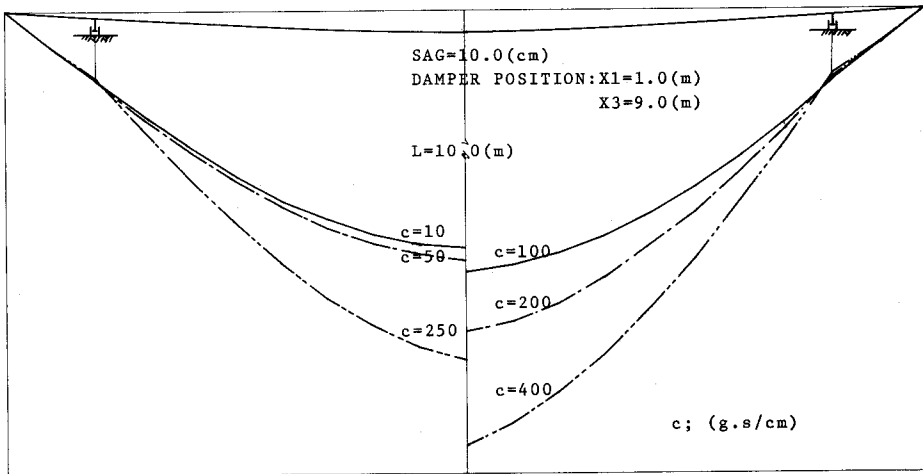
$$Y = \frac{P}{2\omega \sqrt{mH} \sqrt{D_1^2 + D_2^2}} \cdot A \sin(\omega t + \phi)$$

$$A = \left[\{ (D_{11} + D_{22})\eta_{11} + (D_{12} - D_{21})\eta_{12} - (D_1^2 + D_2^2)\eta_{21} \}^2 + \{ (D_{12} - D_{21})\eta_{11} - (D_{11} + D_{22})\eta_{12} + (D_1^2 + D_2^2)\eta_{22} \}^2 \right]^{\frac{1}{2}}$$

$$\tan \phi = \frac{(D_{11} + D_{22})\eta_{11} + (D_{12} - D_{21})\eta_{12} - (D_1^2 + D_2^2)\eta_{21}}{(D_{12} - D_{21})\eta_{11} - (D_{11} + D_{22})\eta_{12} + (D_1^2 + D_2^2)\eta_{22}}$$

3. 数値計算について。

模型実験装置の諸元を用いて、計算した結果の一部を次に示す。



上図は、ダンパーを 2/10 点に対称に設け、粘性抵抗力 C を変化させた場合のケーブルの振動一次モードである。なお、当日は、ダンパー位置を 2/5, 2/5 点に移動した場合、位相は大きく異なる、実験値も含めて発表する予定である。

4. 参考文献

- ① ケーブル橋の防振に関する一考察 (1974.10. 第29回年講) 高橋, 松山, 山田
- ② ケーブル橋の強制振動について, (1975.2. 土木学会東北支部) 高橋, 松山, 山田
- ③ ケーブル橋の防振についての基礎的考察, (1974.2. 土木学会東北支部) 高橋, 松山, 山田
- ④ 機械振動 (巨理厚, 丸善)